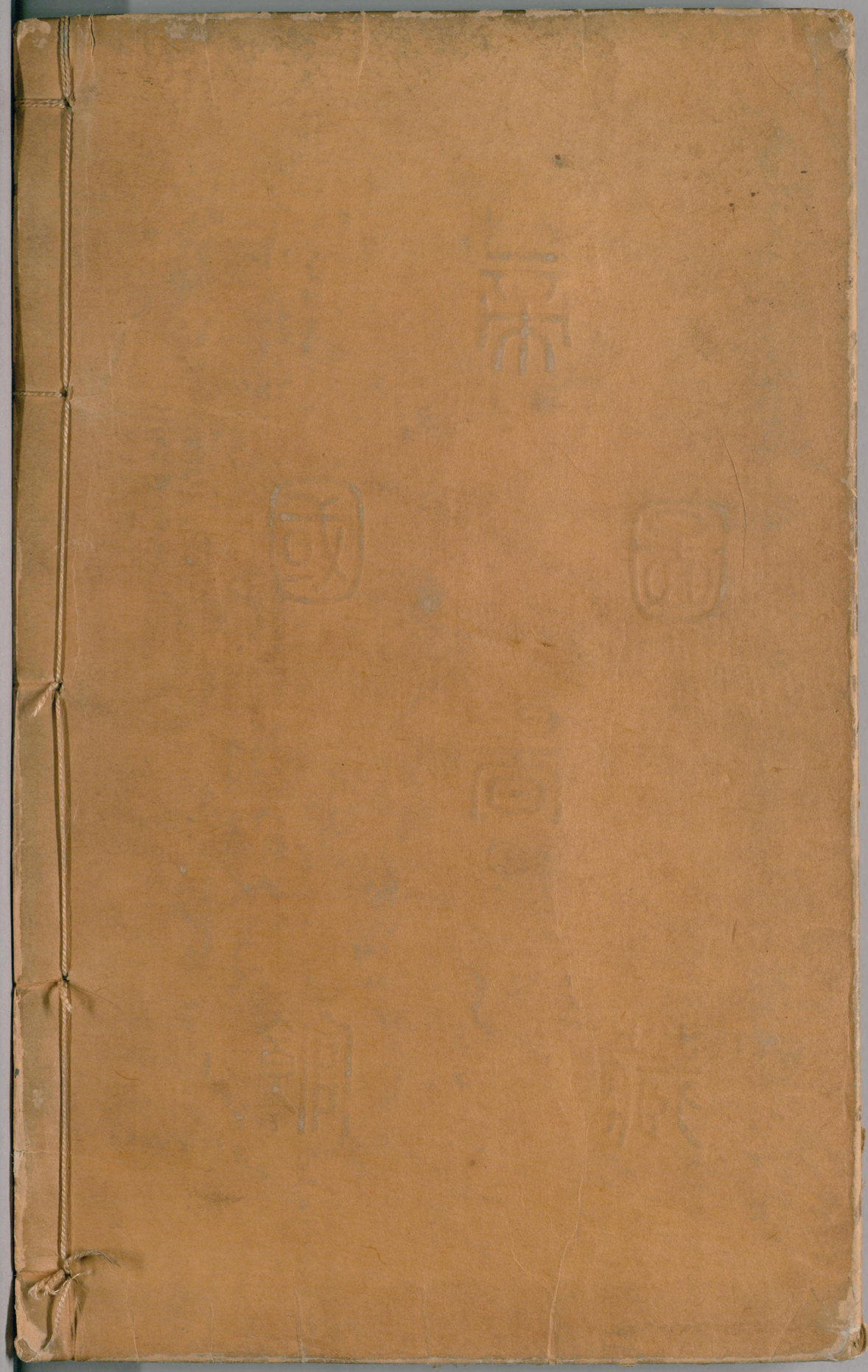

# 太閤記

七八

WB41
125

帝國圖書館藏

ガラス使用

# 太閤記

七

131
22
78

WB41
125

東京圖書館

和書門
雜史類
一三一
四函
二二
一ノ架
七八
三二號
二二冊

国立国会図書館　タイトル『太閤記 : 22巻』 請求記号 WB41-125

ガラス使用

帝國圖書館藏

TOKIO LIBRARY 東京書籍館 明治五年創立 FOUNDED BY MOMBUSHO

## 太閤記巻第七目録

所司代（しよしだい）之事

金賦（きんくばり）之評（ひやう）

根来寺兵火之事

四國退治（たいぢ）之事

関白職（くわんぱくしよく）并家臣（かしん）任官（にんくわん）之事

大佛（ぶつ）殿（でん）之事

北野大茶湯（ちやのゆ）之事

明治九年文部省交付

東京書籍館書印

是ハ極者岩御書キ候さエ

此本ハ更ニ高ズヤの写也

鈴一 御行り

# 太閤記巻第七

## 所司代之事

天正十年六月下旬（げじゆん）於尾州（びしう）清洲（きよす）信長公家（か）老（らう）中として。信忠卿の若君を宰（さい）となさしめらるべきまで。洛（らく）中之義（ぎ）裁判（さいばん）にて致とのうみによ里。柴田修理亮（しゆりのすけ）羽柴筑前守池田紀伊守丹羽五郎左衛門尉より。所司代一人づゝ出し置れ。秀吉公之威（ゐ）日々月ごとに弥増（やまさり）けれは。天正十二の四月より。池田丹羽の下代をハ引給ひ。今ハ秀吉公之所司代のみにて。家勢（かせい）おひ

をかしくぞ成にけり

## 金賦(くばり)之事

秀吉公御蔵入(くらいり)の弐百万石余(よ)なりしかバ。金銀米銭(べいせん)ありあまりぬるまで夥(おびたゞ)しき事なりけり。かやうに遠年(をんねん)と財宝(ざいほう)あつまりぬるを施(ほどこ)さざれば慳貪(けんどん)くつまるとやいはんはあらぬ也。たまもあるまじやと由己(ゆうこ)法眼(げん)に問(とひ)給ふ。所いと宜(よろ)しく侍る旨(むね)申上しかバ。すなはち施(ほどこ)しせんとて。天正十三年初秋(そしう)の比。金子五千枚銀子三万枚諸侯(しよこう)大夫等に施(ほどこ)し給ひけり。聚楽(じゆらく)の惣門(そうもん)南の方にをいて。臺(だい)にすへおかれ金賦(くばり)あるべしの給より晩にいたるまで事盡(つき)になり。此後又天下の諸(さゝ)に及ひ給へり。京童(わらんべ)見物しく興(けう)にめでて云やうハ。浩蕩(くわうだう)之地なるべし。かゝる古今に傑出(けつしゆつ)し給へる君なりとぞ感(かん)じあへりき

評曰。此度の金賦并薨(こう)じ給ひし所の御遺物(ゆいもつ)。何れも子孫(しそん)のためにして民の為(ため)にあらず。大臣小臣にほどこし金銀盛(せい)く持し人こと富(とま)しめざるが。実(じつ)に虚(きよ)之患(うれへのみ)而已(まこと)也

ガラス使用

に至ては周るをすて冨るを継なり。金銀を多く分銅にし給ひけるゆへ民とかくせめられ給ひしに周く也然は民の為に百分一も施し給ひてこそ。御道にも近かるべきに何ぞ瓦礫に同しくなせり。千枚分銅の数をもひ。珍しき調度を飾て身獨をおごく楽しむるのみなり。或問。民乃ためには何をもつるなり宜しからん。答曰

一宰相職を撰ひ。奇ものを清くて國の宝とし。

一万倹約をもちひ下情に通せらるべき事

一國家之安否を照明らかなる者をもつて奉行給ふべし。心眼ある横目をもつてえらへハ。却て邪悪弥増に成り損に至る事

右此あらましを以政ハ謙抑し給ひ。民乃父母たる遍し。又度々乃撰を諸侯大吏へさせて。或ハ大伽藍等を多く作りとなさ。或ハ築廉とおもひやりし上下をくるしめ。あまつさへ金銀をつひやすそ給ひしより八國々乃橋代くに依て盛大なる。然るに五百十両或一両或五人三人乃橋をとい。二ヶ國乃守護人金銀をとらへたゝ。石の橋に

掛られし旨を被二仰付一て。民の為永代盡せぬ
恩沢なりと云べし。去ハあれど其費をいとひ
おかしきまことハ二年軍役を務るし給ひて成
ともに石をとりて掛給ひけれ。いつを限の徳沢り
て給るべきかに。心学なくして記し玉へ世に世銭
自由し給ひしに依てく。秀頼公御代となりかく
しき事もなつく焼亡し給ひき。御遺物
に名物乃器并刀脇指金銀等恩賜るを
しるし。秀頼公もしやの裏を救ひ給るやうなれ
おもかしくおかしよりての事なんめりだゝ

あるに大坂寅卯の急難に誰か秀頼を扶ん續
給ひし。下まる世よ去るし上下の義理あるそ
かに到し夜中を給ひし。去元大旨ハ秀吉公
旧君信長公此御連枝に対し義理を遠由
給りて。又秀頼にハ法に義理を存忠をな
まつやかくあつかしくおもひされかハ。信長公
之厚恩を忘子孫に至し。何そ報謝し
給ひきり。やうの事にハ闇くして。秀吉秀次
秀俊等と云ハ甚しく厳立もなし。仰まで
独御身に立給ひつる。噫情まてハ天鋼中も

符節を合せる事にしそあまた呂后の呂氏をたてゝ呂禄呂産を大官に挙。高祖の子孫を蔑にし。王莽が王邑王尋を官爵に進め。光武の苗裔を亡せしも。遂にこれも劉のあることなり。氏族門葉はたえぬ呂后劉氏をたふさ。王莽君孫を守らなし。我家つ乃懸栄も。永く傳りなん抱をとく今にしそ思ひ合されけきに。凡て理に背き富なんとし業えんとすれハ。家を亡ひ果る物なり。我家山城守道三。松永弾正少弼久秀なとも。大に惑溺に繋縛せり。故に終りをよからす亡ひにけり。和漢合符之妙理。心あらむ人こハ學識し侍れり。國勢富貴並余なき人すら心まかせに一旦おこりつ。忽に榮華をのこして。天下をまうかる道ハ。少もしる天下の為に終すとく

○根来寺兵火并千石堂之事

根来寺の開山ハ覚鑁上人なり。佛法修行の靈地なり。法度厳密にして時務にみたしりとこも。武道を専にし。不用二國司之下知

不知変道遂に空陥不義輙近之鑑戒。
動もすれハ乱国家悩下民之条為追伐天正
十三乙酉三月上旬秀吉率十万騎被発向紀州
将ハ大和大納言秀長羽柴中納言秀次
なり。紀州ハ根来寺雑賀中として岸和
田乃並千石堀。積善寺濱之城。二千所要害
をかまへ。造物乃弓鑓之鉄炮を多く
籠置。軍勢雖未之自由を妨ける條之千
石堀の押へハ秀次。積善寺の押へハ長岡兵部
大輔父子。蒲生忠三郎。濱乃城をハ中川藤兵

衛尉高山右近等ハおさへにそなへり。筒井順慶長
谷川藤五郎。堀久太郎。都合一万五千。三月廿日
未明に根来寺をさして押けるに千石堀より
弓鉄炮の者五百人計出。はや勢を撲あひけり
数多に射て手負死人且出来し也。秀次是を
斜に御覧し。千石堀乃要害ハ傍に構待り
しかハ。塀柵なともしんかくきひしかりとも見へし。
いさおれら鉄炮の者ともにとこおひに馬を入
寄よ川ろく。千石堀へ不取入やうにせよ。さるかと
ありハ付入に攻込ハ施しと下知しあへハ。秀次覧

は田中久兵衛尉。渡瀬小次郎。佐藤隠岐守なと三千計にて捲あひに馬を下への気色にみえて進みけり。筒井長谷川堀なと是を見て。あれ勢ハ用にたつへからん。ゆるそ千石堀の要害を攻捕事もなるへきそとて備を西に向て立迎けれハ。いや秀次乃先手堂と馬を入来て入乃ら鉄炮を四方八方へ追散しけれハ筒井堀長谷川か勢も同しく逃るを追て千石堀へ付入ませよと喚叫て進みかゝり。秀次の先備何れの勢よりもはやく。大手門へひしと付責へんとそ揉よけるかハ。二之丸乃柵を引破り。堀へ飛入飛の攻よりけれハ。城より鉄炮をいてちる途と討殺し手負し。味方の勢多く討れけるよ。秀次我馬廻乃者助よやと下知しあへハ。まてくてなまり物かとて。若武者ちん共進みけれハ。先備是よ力を得。二之丸へ乗入。三百余首を揚て勝鬨をと上首とハ旗本へ持せ来り。さてまたく本丸の堀に臨ハ。実も名城の名に甲斐も揚高く。か飛入所ともなくかんしけれハ。此の寄けきの物うけ小志こり。城よりの勢を得えるよ。城中より鉄

ガラス使用

紂(い)まださしつめ引詰(つめ)よりもし紂なし。味方(みかた)の猛(もう)勢は千計手負死人出来しけり。堀ハ深(ふか)し。橋ハ引さ星いかゞハせんと思ひ労(らう)ひしか、よさに四方より方々を火矢を透(すき)間もなく射入、長屋を焼立しかば運(うん)こそ尽(つき)てありしか。鉄炮の薬(くすり)箱(ばこ)に火入て、さながら雷(らい)の如して城中一時に灰燼(くわいぢん)となつて、千六百人余紀(きし)おゐて勇(ゆう)士の誉(ほまれ)ある者共、焼死し又落城まつもある二千人の本城より、是をみんとくに明のきゞ根来るさして落来るを、秀吉仕けるにゞ石狩(かり)ゆるく労(らう)せし勢ハ休息(きうそく)せよとて新(あら)手(て)に六万騎を

さし遣し。其競(きほひ)を以根来寺を殺(せつ)伐し公略すに、も成べくハ、むかしの度を頼まへきさりて喜(き)志あらひ去、𨈬兵(きつい)あまるさお落(きん)られし也。名もまはり(うけまハ)実(けんよ)もとうても根来衆へ手(て)掛んとすとも思ひよらし。備乱(みだれ)さ備やうよ下知(げち)をなし、汗馬(えんだ)を止めおりけり。陣中(やぐちう)の刻(こく)に攻かゝり。根来衆ハ闘(かうせハ)勢なりと遙(はる)か逃者三千余騎(えく)ひ出し、ゞ石堀の城内二ヶ所の要害(ようがい)へ籠(こも)りしりほどなく大目出度(そくらくきう)計そ諸ゞまろ禦(ふせ)ぎなりし、多勢の旗首(そくびら)見んとそ大へ見んとハせ根(こ)ぐ人先手に退(のき)る事を急(きふ)して其数にあるハ何(いづ)れ(ぞく)ぞ

に武強雲(きやううん)はもとよりこそ、強く拵よそほひと云志ふかく肉にせまりや将軍(しやうぐん)の先勢根来寺につかひて撞(どう)と鯨波(ときのこゑ)を挙(あげ)させれバ、寺中(じちう)の衆(えんく)や腰(こし)をぬかし度(ど)を失ひ十方(とはう)にくれたる所へ攻入しかバ、老比丘(らうびく)稚児(ちご)等衆(こうしゆ)上下の人々年久しく住なれたる院(ゐん)を捨(すて)蜘蛛(くも)の子を散(ちら)しけるがごとく、おのがさま／＼落行形勢(ありさま)哀(あはれ)をとゞめぬなり。扨(さて)あとに乱入されバ、我々賊(ぞくへ)運しかうる掠取其外金銀米銭(ざいせん)山を積(つゝ)らめぐらしを飽(あく)まで奪(うば)ひとりてたり。寔(まこと)に俄(にはか)に殆(しく)人と成し者も多くこれめ、堂塔(だうたう)寺院(じいん)一時の煙(くえ)

燼(じん)となりぬることハ前代にてあまりこと哀(えいく)なれ事多かりしか、元月日こそ天正十三年三月廿一日にて。空海(くうかい)上人の法心に合ぬ所行(しよぎやう)にて斯(かく)ハ元悪(わるびそ)めるにと都(と)鄙(ひ)の衆法志しハ不正(ざうやま)

評曰。遇(あふ)二自業(じごう)自得(じとく)果(くわの)一ハ責(せめ)事するのこわしもあるなり。比叡(ひえい)山(さん)なども理(り)に背(そむ)き大師の教法(けうぼう)を不用(もちゐず)して破滅(はめつ)の期(ご)を招(まね)き、又子として父母の心に合ずて陸として八主君の命(めい)を背き、自(みづか)ら罪(つみ)に沈(しづ)むの基(もとゐ)多し。孔子(こうし)曰、夫(それ)人必(かならず)自侮(あなどりて)然(しかうして)後人侮之(これを)、家必自毀(やぶりて)而後人毀之(これを)

國必自伐而後人伐之とかや凡大小となく皆自業自得の果にて責に逢とみえたり

かくて雑賀衆を可被征と進發せられけるなるに。大田村に楯籠る一揆共三千計弓鉄炮をおかけゝるを射すくめし。道を塞つゝありけるに。秀吉宣ふハ此城ハ一旦に攻へからず只水攻にせよとて。三月廿二日四方に高く堤を築廻し紀ノ川を関入けれハ。四月朔日二日にハ湖水の波蕩々たり。牛馬鼬鼠やうの獣水上に浮出哀なりし一興と催しける。城中より急に来てお降しけるハ揃首面乃年寄乙名らく者百五十人余服して殺へきの案申けれハ悉く御憐愍を蒙させ給ひけりまと歎しかハ御免あるへき旨にて一揆大将共に名あるも記重ける猶其百五十三人切腹し。城を渡しけるぬ。中村孫平次此城にあるへきとて遣。熊野まて色乃者とて征し給ハんと評定ありつる處に新宮本宮の社人熊野川谷々浦々の長百姓共降人と成て御勢をも及ハせて幕下にらんと侘言申御禮に参り聞に出て熊野にハ苛役而多くありて讒人著むるゆへなる

ガラス使用

けるとぞ。今日より諸城に停止ありて関役所迄く除き給ふ。有熊野山別當にも此後出来り

評曰、信長公の時にさへ不落処を、斯廿日計の間に根来も雑賀熊野も山中の一揆等悉く打なびけ給ふ果敢決断の程よく勤弁したまへし。又いはんや関役所停止之事、末代旅人の賜なり。智勇才果敢決断之名将なるべし

---

## 秀吉四國退治之事

天正十三暦乙酉卯月廿四日四國退治として御下知ある秀長、三好孫七郎秀次、此人々を別将としてに六万余騎之勢と和泉出船し、翌廿五日至阿波着船し。翌日長宗我部新右衛門尉が居城和気之城を、秀次の大勢を以て責寄けるが、ほどハなく責寄て手囲之井楼をあげ、鉄炮にて射すくめ、既攻入むとせしめければ、寄手よりも戈を捨、甲を脱て請之一命之處。此城を請とる新右衛門尉、人質を渡し退けるとかや。元親が舎弟長宗我部親安が居城

ガラス使用

一の丸をハ秀長のまへ貝鐘を鳴し攻けれバ程て水乃手をきり仕寄を付ければ鉄炮隙間もなく。打入く攻けれバ。雑兵抱や思ひけん降人と成幕下に属し。先駈の勢に加てなり。同國木津の城とて地の利全き名城なり。東條関兵衛と云し者累代之居城なり。依て秀長秀次の勢を合て取まき。持楯亀甲竹束把を付せめよせ。塀一重計に攻近けれバ。雨風をけしき衆を従へ出。漸く命計助り退になりて名指の高名射ハ。率ニ又千騎讃州八島之城へおしよせ。町口を破らんと相戦ひしまに鎬を削り鍔を割切先より火炎を出し。込入けれバ討死有。終日戦ひ暮しけると云共。殊に秀次のて歴々の勇士多く討捕。そこまで付入に城を乗捕。城主父子兄弟九人之頸をハ秀吉公へ差上してなり。此威雄に依て四国平均なり寺治め。七月中旬帰陣ましそなひけき

評曰。三月上旬に出勢して。七月中旬に西国を平均に治められし。只秀吉公の才智なる余りなる故事流るゝ乃如くなるに依

てなり。秀吉秀次の思慮のことなれハ。中〳〵かく
ハあらし。思ひの外事上一人より下ハ郷民に至
事符節を合せたるよりも甚し。信長は
書ひく云旧し事ありけれと。信にてかくろ
けまて又天正三年信長公長篠合戦に
武田中より三千挺の鉄炮を。五月廿日の
晩に請取湯浅甚介猪子兵介なと云人
裁判し。廿一日の早朝より自由に采配
鉄炮をとらせ。世に得たるなり。いと安くそかんなりし。今
世に鉄炮の者五十三年おりぬ年を經て

にけつき人々も葉乃鉄炮のやくにハあらし。是も
信長公戦場にて数十人面〳〵に申付やすへきを
かくやおりとさしつゝ請けまり。此ぬ絆をも
しかへ。然ハぬ程急ぎて勇をもつまさくり
悪し。とせよかくせよと浩く捨く地にて
下知しあらる遠よろしかるゝ者なるへきか。
姉川合戦を八勝雖あるにまかせしや。
此日の出立海気象物語ひきくかんえし。
其外の合戦ハ此かしやふるまひし時。思因
助左衛門尉語りけしき。大坂寅卯の戦ハ

或國守へ光ハいつくまてくわかれハ何とうかあらんとぞいへとも是まてとまそりけりしくもあらさりしと。其臣語り侍りし。坊ぬ藝ニ出そ。伴此評諸道勘古諺對仁とゆかう感し侍りき。惜乎此彼也ハ武勇智謀且備りにと世まれなる士なりき。然家こか事ニ不意哉の山人と成てく年をむなしくし侍りし事

---

○關白職并家臣之面々任官之事

大永之頃より至天正年中家國争競し。朝威ハ蔑ニ衰へ武命四維ニ振ひ盛にして公武之間もなく名ある家之為新。末世と云なり。雖然とも其さ之ハ誰かふかんおさ海かり ける者なし。信長公出給て興王道之衰ところを敷万民之窮迫を救ひ給ふ。王法も且古へに立帰り。官職之家も且所を得たるを覗しきる處ニ。天正十年夏為逆臣弑せられしかば四方悪逆之徒黨如雲霞蜂起し。上下不安しと。秀吉不以危朝年ニ平治し給ふ。去天正

十二支まて八将當と云し給ふ事は始めとや思ひを焦しわびしかりし立年の昔八世前出来漸おそやかなりし也。近年大嘗會之政も才諸百官之勤をおこたり計にあれかれなりしと。大嘗會絶てこれなきを内裏の東に院御所を造営し。太平の御代に成よろこびて秀吉公を官職推任し給ふ宣旨ありての給ふことありし故秀吉公是を且申すて称号に摂家の内として関白職を争ひ給ひしまのて。関職九三々年第の晦日首せしによりて

秀吉此職を望ことなし。許し給はんかたもなきをいかゝあらんとおもひ給ひけん。大臣家より。とく許し給ふへく可なりんと。諫をすゝめられしは主上勅許ありし給ふ。然る辱き旨を参内し。給りんとあり。依て是の人々も頂戴に宣旨し任官せしむことは

尾張内大臣平信雄　法名常真
駿河大納言源家康
大和権大納言豊臣秀長　秀吉舎弟
近江権中納言豊臣秀次

備前三議豊臣秀家　（浮田直家之子）
加賀少将豊臣利家　（加賀大納言云）
三河少将豊臣秀康　（家康之息）
丹波少将豊臣秀勝　（秀次之舎弟）
龍野侍従豊臣勝俊　（後住二東山表、号長嘯）
岐阜侍従豊臣照政　（後為二備前大守）
源五侍従豊臣長益　（法名有楽）
三吉侍従豊臣信秀　（信長公之連枝）
津侍従平信兼　（信長公之舎弟 織田上野介）
越中侍従豊臣利勝　（羽柴肥前守）
京極侍従豊臣高次　（後為二若狭太守）
井伊侍従藤原直政　（童名満千世）
金山侍従豊臣忠政　（後為二美作太守）
伊賀侍従豊臣定次　（筒井順慶之息）
豊後侍従豊臣義統　（大友）
曽祢侍従豊臣貞通　（稲葉右京亮）
松任侍従豊臣長重　（二代丹羽五郎左衛門尉）
土佐侍従秦元親　（長宗我部）
敦賀侍従豊臣頼隆　（蜂屋出羽守）
河内侍従豊臣秀頼　（毛利河内守）

丹後侍従豊臣忠興　細川越中守
松島侍従豊臣氏郷　蒲生飛騨守
北庄侍従豊臣秀政　堀久太郎
東郷侍従豊臣秀一　長谷川藤五郎
左衛門侍従豊臣義康

此人々何も秀吉公氣肉之儀與せられけり。武家之面々任官せられしより。後にハ多く任官受領せしもおびたゞしき迄と當代にしてハ此人々を初とすなり

## ○五奉行之事

淺野弾正少弼ハ秀吉公北の御臺所と同しはらからにハあらねど兄弟の因ありけれバ。每事内外共に評定之座につらなる者也。玄以ハ信忠卿に事へなれたる者なれバ才あり。信長公ハ才勇兼備なりし將なりし人なれバ立あしくハ何しとて撰ひハされしかバ。長束ハ丹羽五郎左衛門尉に仕へ。每物の裁判やりとき滯事なき能者なり。増田石田ハ江州小谷入部之時より出て。若より勇を盡せしなり。殊増田ハ万事損益に聰くして。其性剛なり。石田ハ

諫に付てハ、君気色をとらハ、従る事なかれ、万民を好し老として、みだりに定め給ふ。前田徳善院玄以ハ、浅野弾正少弼、増田右衛門尉、石田治部の少輔、長束大蔵大輔とぞ申ける。是を五人一職に定置るは、毎事たゞりきりしきの条

一　徳善院僧正ハ所司代として、洛中洛外之出入、神社仏閣之義に至迄、一人として裁断すへし

一　長束ハ知行方をも万算用事を掟、己に任して裁許可仕之事

一　三人ハ万端を相談に随り、諸人之雲珂に

と分別尤ハ、大なる事ニ於テ停滞におよびそハ、五人としてしく評議宜に付て、撿可大猷定買る事なきは、三人二人としても又両一可しる

一　国々之取沙汰方并納之義、早速埒明之やうに油断有之間敷事

一　訴る之義に付てハ、心を虚にし、曲直を正すへし。

一　富威募りたる者とて、才勇不足なりとも、於貧者之公事ハ不尽理、闘庭沙汰有之ても汚名可蒙之事

○宰相有司病之光　（宰相ハ日本之執事の仕置の長　有司ハ小奉行也）

第一　私欲依怙賄賂

第二　以私宿意報寇事をひそかに謀りて毛を強てもりし人疵

第三　金銀を蓄へ過酒宴遊興奢外見を紀

女色美食等

右は病根ハ貪欲を為宗とするや此病根を癒構しく扱けるハ忠信あるとも欺し。去らはあまたとさをを作ミ、是非之賦に付く、至利を除さて、或代官等百姓とおへあさと出来せんに。隠せし苞苴或ハ寺社領留之謡ありの

争に付ての音信ハ、ゆかりありと云共、納むへからさる也。自他恥辱して道防つき事肝要也

評曰。奉行之用にたゝさるとも国にあつて佐臣を或人交座ばゝ奇妙に覚て徳あり。是猶ハ宰相として才器を撰て人にあひとむ親疎を不撰とあり。是に依て東西の果までの人と云共、才智ある時ハ、是朝にハ宰相の職に推任せしと也。然に偏て徳義を見て行ある人多かりしきや

## ○大佛殿之事

秀吉公聚楽におはしけ迄ハ洛中洛外のにぎはひ侍るやうにおもはしくありのまゝ[illegible]て東山に大仏殿を建立し給ふべき旨。五人之奉行衆に仰付られけり。昔ハ廿年に造畢せしとなん。今度ハ五年に成就し侍るやうに工夫を廻し[illegible]旨ありしかハ。照高院を宿所とし[illegible]召寄評議しけり。先奈良之大仏師宗貞法印同弟宗也法眼。大仏棟梁として大工を呼上せ。其外[illegible]

得せんとて。井上源五まへめぐらし旨。五人之[illegible]ありく云送りけり。右之職人共[illegible]上京し。照高院に寄りしハ。各寄合て[illegible]しの宜しきやうの見物に記し付つゝ又人々に[illegible]。[illegible]上覧ありて[illegible]御気色よ[illegible]材木裁判之為[illegible]仏師[illegible]及[illegible]記し付見るに。第一土佐第二九州第三信州木曽紀州熊野を宜しかるべきよし

を極りける。ゆへ人は作りにハさるへからす今撰り二千人。大工廿人撰出す。肩よかけしハ御氣色よかりし。大工なれき遠吉浣一人の統と定め、随分からく宣くへく人々なりよ。二三百人撰さんとせしハ、率り出ますむとおれされくのまありとかや。四國九國くへてハ古作く山中へ分入りくハ材木を出し、淀鳥羽へてまと雲紅勢尾濃三ヶ國之人くハ木曽山之材木を出し、河よ流し入。勢州桑名よと出しましもより大船よ積み、南海に大坂よおいて、遠吉浣よ渡し賞へたり

一　大佛地形之事

又畿内中國之人くハ大佛之地形石垣築事山多るく善信深キ勤旨移し。地形之下を東山仏光ちなりけまハ、遠吉浣善信之町場をはしつけぬ。二十一ヶ國之人数を地形と石垣築山に河よかけし能付けしとも。石垣大けなるよよ國て後ハ何も石垣よ加りぬるまて此國勢とも又くさせたまふ

一　佛象之事

大仏を昔乃様よかへしよ而て紛をまく八丈くし本あんとて木像よ拘し漆膠をぬりて彩色丁

中ノ有佐なり。震旦にて仏像作りしを始とあらて
しと申上しにけれハ。実鉄にて大像を仏とハ木像
而し。漆膠にてぬりしは六百年ハおちぬべく候ゆゑ
けれハ。四五も有ぬ寧へ申上しかハ。大仏を高欠室下
よしに仰付まなり。手傳人ハちる蒲鏡壊する早川
う馬以下桐東帝に古田兵部少輔松浦内膳正
間備表あり也。堂乃高さハ二十丈。仏の高さハ
十六丈。昔より意法あまれハ今ハ増減あり

一 漆膠之事

手傳人ハ池田備中守河尻肥前守上田主水正

---

なれハ塼之と升家久なり。仏像を衛来らぬ。
蝸殼ハ方僕に高さ一丈ほど有。唐人指図に付て。
携刑尾なり。へ高ちりしけれハ其光蓮て高郡なり
とうきうかなれハ。此ハ雄鋼と呼んぞ。是は心お
守山高き者とかや。其丈六の所よりかきおち
あらし世とみられく。まいらる鷲山の其か伽藍立たき
とおまらし建立しぶ。其後のなよあん焼なりけり
関白及まき。後ハ寺まて。大仏建立のことありて
肉と自よて。つきに法佛光ある地形にて肉まに。世尊
と給へ。常住の信者として急しけれハ速成候

加りぬ。然る所に山下法師なへやうのことに到て大伽藍の事侍る所に宜しきの造営多くありけり。仏像又こしらへ末は。漆膠をぬりぬぬ。東のかたに築山を作らせ。虹梁なんどをもつて車にて廻し引上。毎日の普請も自由なる事かくなりぬ。人夫多くなるなり人許にもてよろん虹梁を。百人はかりにて車を廻し引上けり

一四方石垣之事

垣ハ小なる石にては後世仏法衰へに及ばゝ石とも小さきは盗を取に便も安かるべしとて。事外大なる石を以重て築垣し。然に蒲生飛騨守引し石ハ二間四方もありしかば。多勢を以引けり。石をとゞむるとて作らせ。其やりの声金銅鳥異形の出立に拍しけるは。見物の貴賤押もわけられぬ計也。白川の奥より大仏に至るまで及べり。興山上人も信人毎日五千人宛続けり。るを常に作らしめ。日数漸二ヶ月に及びけるが。此なさへにて方人ハ材木ハ木曽山勢州山ゟ九國よりも取寄せられ。富士山をも見せしめ紀州まで。総大木を以て大工の棟梁を作らされけるとかや。

棟木になるべき自然をもとめられしかども唐へ人仰付きてせつ。然程渡海へ出し。大坂に着船す。此木一本さへ五万人黄金多くの入用をもて是をしとゞやおほせまはりして大仏成就し。纏みと繕あつて。おほきられの供養をとげさせ給ふまでの費をかぞへもしりかたかりけるに中々言の葉にも及べきにあらずとて眉根顰めにけり。

或老人曰。金銀之費万民之労といへども是世に満せるく万紗ひしまと動くへ見るに。異朝にてハ秦始皇。宮殿にして八秀吉公安まかすへしり来めるなれや。始皇ハ二世にしてほろぶ。後漢の明帝大仏を建立し莫大の利益をなす類まゝおほくありし人とも万民にしたしく思ひつめ。いつ語りくへといひ満しめ。かまの九一人利益に預らんとや。吾党乃好む所とハ雲泥懸隔せりと云く。我志ハ及つ杖に助られ行のおとゝしをまる。本老人ハのよかり。又或問。然らバ国病是のミをもおもふをいふハしても愈へしや。答曰。天下にもゆしまとも手援して学を脇ありなも。国病おとりくなれりと願ふ兆の面ちらんハ也

汝よりもおとるへくとも、すくれて能あらん。師となしならひなられて。君道くらからすとも。是を不害則豈國病不愈乎

---

### ○北野大茶湯之事

天正十三年十月朔日北野松原にあつて茶湯を御興行ありて。都鄙数寄者あまた此気味。或風情を或茶具あると一覧あるへきとなりふれ

来十月朔日於北野松原可被興行茶湯者不論于貴賤不拘于貧富望之面々は来会可携一具無楚無薬好倹約営于宇は秀吉数年年来集置給ふ所の具かさり立てらるへきの条望次第可見物者也

八月二日

洛之上下奈良堺よりも是をきゝしかハ。佗たる乃面々も是ハ聞出御代よりかく。價をきかさる道具を指出し。又佗たる乃名誉をも達せんと悦ひも有。洛中此をきゝやハるとも云。秀吉公御感ありと聞り。場のあるさ者たゝ一あて當て常の名人

国立国会図書館　タイトル『太閤記 : 22巻』 請求記号 WB41-125　ガラス使用

かれと浮さんと巧を作りもする

評曰昔へより堺の南北ハ秀てゝ数寄者多くありて洛中のそれを蔑しわし思ひし。察するに洛中のすきたるハ皆失暁し堺の町人なる武士の風情よりもちうてまし交ハり又堺乃数寄者ちんちんたるハ察し数寄者の風情をもよれともわきたる心よりけきれハおのつからに和し作りぬ。連々すたれをいけにけり者。又左ハあまけまきども徒侯もまもを載せし耳かくせん面。近習御伽こたえ内ハ其器を撰らへハ三百人

人金ハいと及ぶ小数寄の茶湯にて玩ひて白練香院宗仁千宗易なとて翫しまりしする礼之旨よ任せて茶園より上洛し小数寄に恵を嘯きつ心ありて此おもむきハ思ひの外なれハ一入興してかんえりけるま

### 秀吉公御道具之目録

- 一 若楓
- 一 虚堂墨蹟
- 一 鐘の繪
- 一 松しま
- 一 鏑無
- 一 内赤の盆

国立国会図書館　タイトル『太閤記 : 22巻』 請求記号 WB41-125　ガラス使用

一にたり
一あふみ茶杓
一七つ臺
一珠徳茶杓
一白天目
一象牙茶杓
一かうの蓋置
一紹鷗水翻
一波釜こあられ
一五徳の蓋置
一紹鷗天目
一そろりの花入
一瓢簞
一紹鷗茶杓
一尼﨑臺
一かうろく釜
一芋頭
一柄杓立桃尻
一縁桶
一胡桃口の柄杓立

一せんりう香炉
一備前筒の花入
一志賀
一めんちく　写芳墨子　居
一りめさの水翻
一折ゝめ乃茶碗
一井戸茶碗
一朝山
一四十石
一新田肩衝
一なまとごせ
一やせろけの天目
一細灘
一○め氏水さし

右之御道具をあまた御所望をもつてしゐ給ひてかざり給ひしかば、あまねく見物をいたし間と悦びしもの取々多し

一 二番　千宗易利休居士　ミゝあわとト
一 烏丸肩衝
一 捨子葉茶壺
一 尻膨
一 胴の縞
一 高麗茶碗
一 竹の蓋置
一 三番　泉州堺津宗及　三ゝあわとト
一 枯木
一 もの花

一 僧の絵
一 あらしも
一 せめひも　釜
一 塗天目
一 蛸壺の水翻
一 折ための茶杓
一 撫子
一 入道蛸　釜

一 尼子天目
一 折ため茶杓
四番　泉州堺津なやの宗久　ミゝあわとト
一 月の絵
一 ちくさ肩衝
一 とこさん茶碗
一 こし海茶碗

一 高麗茶碗
一 竹のさき花
一 青花　葉茶つぼ
一 姥口の釜
一 竹の蓋置
一 折ための茶杓

經堂し四方之角〻と思ひくよかとひたのし。葦子をかさりつゞくるやうにまきと出てほど亀多くとうらひなりかりごもか大木の下松原

なすに。一入はひ入りてくるまゝまことにかしこき一木の下と楽しむもまた又かゝるひ茶屋とやうむしに事よせしもなをでげにくはしくの興(けい)盡(つき)ぬ。誠(まこと)に中丈百人ことくもなれ共。遊興(ゆうけい)をられと思ひとまりぐし。工夫(くふう)を費(つひや)し給ふ有。此外も方一里(り)八丈に家所(くしよ)をとあらかしけり。秀吉公御とひきこへ三ケ所かうくとしおそ給たをとかさり給ひつ

一番　信輔(のぶすけ)公　日野輝資(てるすけ)卿　家康卿　信雄卿　信兼（穴津侍従）

二番　秀長卿　秀次卿　利家卿　貞通　利休

三番に　有楽　秀勝　氏郷　秀家　忠興

めは御手にあけて御茶をたてられ給ひきすにと此縁(えん)をなへきにとくく。此外にも凡十人計めしつきこう絶え。先(まづ)数寄屋(すきや)出羽守右先へへせかって此茶をたてり。立出の外に数寄屋ともに二三連歌(しやう)れ侍(たん)にも加(くは)へられ。立入給ふ萬家く此くく此精(き)𤍠(ぐん)かかしは能て。出羽守狂言(きやうげん)綺語(きぎよ)しきあはた悦あへりけれども。集(あつま)り茶の興めてしき事なれ。言語(えご)の及べきにあれ共。或数寄屋乃かゝつさ作こと式風(いふう)ひ御に興(けう)せしめて。御

機嫌(きげん)なる事ハ無そ見えしけり。官人の心ハ各(かく)し而
のことしと云しもげにもむべなるかなと思ひけれ。
然るに此時具足(ぐそく)を脱ずして見え待る事。秀吉
公の御威光(くわう)よりおこすんハいかゞやせん。此家来ん
すれどもかく一番ハ心へとかんの事殺害の此笑言を
妨んと思ふてもあり。又價(あたひ)高き肩衝(かたつき)と猿信(しよく)へ
やくとりきしハ儀に使へと申て此道り
思へ待るハいとめでたかりしなり。福原右馬
助蒔田(まい)権佐中江式部大輔木下大膳亮是
来右京亮之丈此五人に此旨を男臣とりなつ

なかりして九月中旬より姫路に立てぞこ
ひの居殿を城方に移しつ。茶事宜しく
お計ひりは言ふとして滞(とゞこほ)る事もなく
調へ侍りし哉御機嫌(きげん)宜しくありて御
茶被下たり

# 太閤記　八

13
22
78

東京圖書館
和書門
雜史類
~~三一~~四函
二一〇架
一二三號
二三冊

帝國圖書館藏

TOKIO LIBRARY FOUNDED BY MOMBUSHO 1872
東京書籍館 明治五年文部省創立

## 太閤記巻第八目録

今古名刀割之事
佐々内藏助さら〳〵越えの事
肥後國一揆蜂起佐々退治之事
桒部長臣冨田切而討死之事
五ヶ動智臣謀計之事
熊本之城内藏助後攻之事
肥後國人反忠之事

明治九年文部省交付

國立國會圖書館 タイトル『太閤記 : 22巻』 請求記号 WB41-125
ガラス使用

# 太閤記巻第八

○天正十一年城郭(じやう)定(さだめ)之事

秀吉公は長(ちやう)小国(せうこく)を征(せい)し給ひしより。威(ゐ)海外(かいぐわい)に溢(あふ)れしかは。万国(ばんこく)の守護(しゆご)仰きても今度之御ほ摘(ぐ)自出すのし。以往去馬太刀奉献(けん)しけり。其次に諸侯(しよこう)大(ぐんぶ)まて居城且(かつ)記(しるす)之如左

一　北畠中将信雄は南(みなみ)伊勢五郡(ぐん)伊賀之尾張兼領(りやう)　清州(きよす)在城(ざいじやう)

一　勢州長嶋之城　同臣　津川玄蕃允

一尾州星崎之城　同上　岡田長門守
一同犬山之城　同上　中川勘右衛門尉
一同苅安賀之城　同上　浅井田宮丸
一勢州安濃津城　織田上野介信良
一但馬並播磨　羽柴美濃守（秀吉公之舎弟）
一丹波　羽柴御次丸（信長公之息　秀吉公之養子）
一越前若狭並加州半国　惟住（これずみ）越前守（丹羽五郎左衛門尉　長秀）
一能登並加州半国　前田又左衛門尉（利家）
一越中　同肥前守（利家長男）
一濃州大垣城　池田紀伊守

一同岐阜（ぎふ）之城　同息勝九郎
一同曽根（そね）之城　稲葉伊予守
一同金山之城　森武蔵守
一同多藝（き）城　丸毛（まるも）兵庫頭（ごのかみ）
一同郡上（ぐじやう）城　遠（ゑん）藤左馬亮
一江州日野城　蒲生（がまう）忠三郎（後号飛騨守）
一同勢田之城　浅野弥兵衛尉（後号弾正　少弼）
一同坂本之城　杉原七郎左衛門尉
一同[illegible]田城　長谷川藤五郎
一同高嶋城　加藤作内（後号遠江守）

一同佐和山之城　羽柴久太郎　后号左衛門督

一丹後　長岡越中守　后号三斎

一若狭佐柿城　木村隼人正　后号常陸（ひたち）守

一同高濱城　堀尾茂助　后号帯刀

一播州三木城　前野将右衛門尉　后号但馬守

一同龍野（たつの）之城　蜂須賀小六　蓬庵（ホウアン）父也

一同廣瀬城　神子（みこ）田半左衛門尉

一赤穂之城　木下助兵衛尉

一高砂之城　青木勘兵衛尉　后号紀伊守

一因幡鳥取之城　宮部善祥坊（ぜんじやうばう）

一同鹿野（しかの）城　亀井新十郎　后号武蔵守

一伯耆國羽衣石（うえし）城　南条（なんでう）勘兵衛尉

一淡路洲本（すもと）城　仙石権兵衛尉

一同岩屋城　間（ま）嶋右兵衛尉

一備前美作　宇喜田八郎　后号備中納言

或曰。宇喜田家運（うん）二代に續（ぞく）する事ハ。毛利右馬頭元就（もとなり）と秀吉と對陣ありけるに。宇喜田和泉守直家ハ備前の美作両國を領し。西ニ輝元（てるもと）を東ニ秀吉を一方となして夾て左右（さゆう）に其利を見かへし此ゆゑに勲（くん）をたつるに。羽柴の家ハ與（くみ）すべき才（さえ）也

とかくして郎等長船紀伊なる戸川肥後なる悪逆おのゝか花房助兵衛尉をねらひ密に讒りけるは。秀吉公今我らが時國々仕置無物なれどもやうを察しにぞりく天下をも守人なりば人にまさり一家運をひらく忠功ある人々の労なき欺ひ悉段氏を擯責せんと思ふにきはめ申して。密に評しけるに。口売なれば後々にはおそくしまさともに大切なる子孫を人質に揮元へ遣し申に約なり。殊に安心も盛とは當此初に給ふぞやとかりそれハ印なり亦此の事哉

然しひつぱうを用捨骨髄に徹し讒りけるぞまことに天地に生る人鬼畜の人也安国に生父母兄弟をよそに重ハ百人に及べり。又人を撫育人を助るんハ國をもつて勤め鬼神も憐みのみゐし。寛恤に弱わき理諸人を撫する八悉主の業なり。所詮直家の非理下に擯万民をもし此義を旨とき正理を守る者は人質に付て遍く家臣への恨みし早いなや乃ち辞すべし。道なくしと有しかそ。皆直家に同じけり。依て誓紙を調へ

よりて、熊野の牛王宝印にしるし、誓詞をかく国をあたへらるべく、秀吉公へも如在なくしてある首尾なりけれバ、事の外悦び給ひつゝ。其身の事ハ不及申、於子孫も全く疎遠あるまじとて、誓紙の旨、蜂須賀彦右衛門尉まつハ申しけれバ、直家健悦し給ひけるく。み蜂須賀を呼び秀吉公より使札を持し妻しく請合しつゝ、輝元に背し敵の色をたて、秀吉公へ丹忠を抽んづを打ちし、其より秀吉公へ丹忠を携出せんとて、東西に奔走しけれバ、猶頼もしく思し

天正八年の春労煩りけるが、嫡子八郎に（後任二中納言一）又父の跡を譲る世、家臣之面々も悦びありき。直家病の身しハいよ〳〵おもりし、労ゆへて待りしが、終に薨逝を謀る気除して、換置り、暁く申し、備前・備作二州を領せしあり。去ながら天命を恐れず、不義に取ちて利に因くめくりし。子息中納言秀家卿、八条嶋に流人と成、襄ある。領寛に従ひ、扇をうへて、遠海の波濤に流しぬ。悪家の義を露程も不忘しるす。其

驕し且兇悪にして主君浦上遠江守宗景を遠謀を以弑し。舅中山備中守を属従よかまり。殺害し。從弟忍ひの城を攻め聟まれ毒して弑しけるがやうの逆悪乃として備作の城を取まきこ生害し。其跡を奪ひとりて國猛く富饒ある出。一旦栄華を待遂共。天これ不義に與へず露顕あり。去ハ嶋津家も不義をおこし理に叶て切腹し故に業守亡されし出ありて給ひ次松永弾正忠久秀。斎藤山城守道三

此両人等も直家にひとしく才覚して利を好み此道を踏行せしが。何も短絶なりけり。浮田家の軍法ハ家中の人数を定るに。何れも四人（戸川肥後守　岡越前守　長船越中守　花房助兵衛尉）それら組へ備まさ添しけれバ。東西のそてくよちまさても。一同にあつまるやうにおしもらへ至て。一人も与えられなかりつるに作りぬ勿論小姓馬廻を初代まで細工人中間或ハ鉄炮或ハ射家の具等も定めおく。何れも〳〵方勢く治し置つゝなけまるゆゑ未乱れたる事を施りしにけり。然る

云事は一統の中なる事なれハ此くらゐを加へ給ふ
なれバ南の方を加へ西の方をおし自然
働く時の用としたり。南方の下知ハ東方
にてハ江東にてしたゝめ下知ハ二人の劉将を
撰んで定め記ず。所の方角のうちから二疋
若武者でも又異角なぞを合せぬ時ハ二人
之劉将下知之圏を以て裁判せしは周の将
事なるにより下坂の車順風の船のごとく
なんとかしなり

---

## ○古今名物割之事

一織田信長公数寄者也武略備まし名士をはまく
執心し給ひて聘礼し城下へ集まりける。まつ
名物を定め置かるべきとて調へおかれし目
録を仰せ渡して候列より半年ばかりハ賂をも
おさめしなかりし程ハぬまで由来を記し給ひけり。
ゆうらく又かまどを定め置かれ二条備中の深田
有楽なとも此風流を継せらる方々多く歌をよみ
云ともいづれ義をハうとんじてよく事かかり
しとかや。その世路次数寄遊宴茶を定め置まる

国立国会図書館　タイトル『太閤記 : 22巻』 請求記号 WB41-125　ガラス使用

備後殿よりちく〳〵倍やうにありしとかや
一信長公の知略古今に異(こと)なり。和漢に稀(まれ)なる事は侍りとて都合(つがふ)をも及ばせ給ひ。当は何をも捨給ひ。也をも大名衆あへハ某(それ)。義ハ其(その)業(げふ)によろしきなり。下知りく自ら給出のを以て一切之下を出し給ふ事も多ハなかりし。天下且治り国風も正しくなりて、よりいふべき法度にて有し也
殊に開闢来(かいびやくこのかた)他(ひと)乃出ずして合戦を挑(いど)み敵(てき)を討平(たうへい)けるもやがて四国(しこく)へ赴き六ッ退居せし国人のうち。当国の陣中に属(しよく)し治る事ぞ。

代々とし国を治け玉ふに周く。其功(こう)を名無実(むじつ)にして果しく絶えず。世を文武にゆりき。信長公に至て世を伐随(きりしたが)へ給ひて不日功(きこう)之信に於刻子則他国(たこく)あしめ給ひし也。かくてこう構没かるに変(つぎ)しも功成就(こうぜうそく)してけり。此格(かく)。信長公より始て今は此義に及へり
一秀吉公恩禄(おんろく)を地とらへあつひしハ信此をもゆるも宜しく。主乃為にもあしからぬやうに給りつ。勇猛山林(さんりん)河海(かかい)なとも其里に付て給人(きうにん)を進退(しんだい)せしなりゞはあれと信長公の知りなきりのやうに

多かりき。損益(そんえき)に暁(さと)く仕る君の恩禄(おんろく)を地に費(つひえ)しつるをみるべし。信長公卒爾(そつじ)にはん高やまし給ひしを。軍法のことは外ハ大かたさゆるし給ひき。唯(たゞ)大やうに所(ところ)しるすとものゝ給ひしおすやまことんぞ法之士風(しふう)ハ何となう淡(あは)く清(きよ)らに大らかに有けりとぞ世紀之士ゐ光一向(かう)用ゐざる者なりしんが又かゝんや。呼(あゝ)附ある

うれしく

一秀吉公尾州と臣下に分与たのまれしによりあしの地とく見合せつゝは。論議(さうろん)之事に及びし出来き。随者中不和(やりくだ)やうにゆめしめし。はかりにも検地(けんち)に給付有り割(わり)なされんとて。検地(けんち)之者一郡(ぐん)へ二三人宛(くに)にて給ひて。ころはさちうち信(しん)あつき者又ハ善勤(きんえ)に達(たつ)し。損益(そんえき)に暁(さと)き者を令せられし也。撰(えら)び人精(くは)しくして誓紙(せいし)にも守りてあし給ひき。制書(せいしよ)如左

覚

一諸郷(ごんがう)境(さかい)之證成紀(せいき)下知之事

一百姓不叶致迷惑(めいわく)やうに事のあらくする

一耕作(こうさく)之外に財(ざい)をうるへき事

一給人（きうにん）ともに能やうに仕置かたあるべき事

一前八田畠（でんばく）なりと云共、当分河になりたるは除（のぞく）ひのまゝしかるべき事

右条々若違背（さうゐ）有之は曲事たるべき者也

天正十七年八月初旬（ちやうじゆん）より、先（まづ）尾三ヶ国より検地（けんち）をうち初。其より尾州智多（ちた）郡（ごほり）をうち侍りしにその比より減（げん）しけるは、めでたき事なりやと、とく。天下御家にまで検地（けんち）をも尽に考合（より）て、評議（ひやうぎ）しけるに、唯治定（ちしん）を致さんには、先しとてやよけまし。

増減（ぞうげん）なきやうにと仰せられしまゝにて、ちやうどにさし給ひしが、かくて三州山川荊（けい）属也、智多郡なく二万石けんして侍りしに依て、たとへ給あしかるべきまゝとあるつれども、一柳吉田作兵衛くゝりてぞありけると云ども、了簡（らう）なりけんとて、又運状（まんどやう）ありくやさしかへん、ぞおりと詮索（せうさく）故のひそかに御帳等を（と）伺ひにくと起るのかやしそ。たゞ給人（きうにん）痛（いたま）はるやうにまちと思ひ計（しどけ）なけに富（のこま）のくおくへのきのひろり。吉田也遠（えんりん）に云御帳之趣則御帳之云へゝと起る事

さやうにとも計給ふべく。何事とても宜かり

しかるごとく法の如くなれ。然る所に三河守殿入

有のごとく語りし

---

八月十六日　吉田修理亮

検地（けんち）成ば慥をおかしし。思ふ所ある君のよく

有もの愚（ぐ）なることを以君の清ことはかなるゝのなれつ

りしはよと弟を責（せめ）再（さい）三赤面（せきめん）に及ぬ。尾州（びしう）

并西三州小伊勢の内にて八万石職（げん）しし志りた

露（つゆ）怖（くひ）路也。異ニ村々を限（くぎ）りむつしかなれや

に分り割（わり）を御法し給ひしに国（らく）て所給て

内小数検地の事と云なりは諸人給りとき

評曰。欲心（よくしん）に溺（おぼ）れて天下之法をみだらん

者にハ八ヶありき。ひとつは賄（カ）（こ）を以法に因て秀吉。

公と内心をすこしもけがさるまじあり。寔（まこと）に過あり

あ不及ゆは志くしと所んなし。八ツ人に記

頼やうに覚し給ふ

一羽未出頭云利を以て分り割（ほり）る。古今めつらし

きことなり。世俗（せぞく）擬（え）ひ取とらん口号（すさ）みたり。たゞ今

令沢く町乃辺（わき）ある一帯を略々前たくみなら

諸人に判したまへり。城下を分りに判し給ふ

ガラス使用

しかも近来古姓(こせう)農民など士に成もしけり。に因てぞ自然に名士(めいし)多く集(あつまり)て寡(くわ)をもて多を擒(とりこ)にしけるぞ。おしまざる度くかはしとぞや。

評曰。何ぞ人無智なりと能治法せしと世に視(み)しめるとも利家よりは言んや。下に甚らんや

傍人(ばうじん)曰。能地を撰(えら)ひとりは取りて其家の益(ゑき)あるとかうれ。其人同其家の得ハあるあらんや

---

○佐々内蔵助励真忠(はげましせんちうを)富山よりはる〲越ける事

抑佐々内蔵助成政ハ尾陽(ひやう)表目弁(ちうずう)取争之儀なりしを。後信長公被封(ほう)于越中之後(のちゑごこ)されハ其君恩(くんおん)を不忘して。あとせ信雄にも秀吉に及矛楯(むじゆん)けるよしと聞。信雄に味方すべしと越中にして義兵(ぎへい)をもよふし。秀吉にハ敵対(てきたい)せり。天正十二年霜月下旬深雪(しんせつ)をもいとハれず。さらくあえとく嶮難(けんなん)無双(ぶさう)の山路(ぢ)をわりまゐりぬ。是ハ何乃地をかけて思ひ立給ふぞやと問(とひ)し士(し)あるを問しハ。其家康へこえ行。家康卿(しゆうえん)に対面して去羽柴筑前守を討亡し。信雄に天下を治めさせ

ガラス使用

謀略(ぼうりやく)廻らして帰(き)洛を迎へ、兼て運籌(うんぢう)をまいらせ度(たく)と思ひけれとも、於二播州一無二油断一様にとふかく思ひ出まゝ侯てたにもあらはし也。岡(と)山を出てより十日計は前田玄以まし。かの所にてより逗留(けうちゆう)ありし所なり。かくて陣中を見舞られんや。よて此日まい海深しさへし。甚ふかく痛とて呉(くれ)し伽(とぎ)の者五六人かよひの小性十人計にて、起請(きしやう)をかせ比義をとへせられ、毎日膳(ぜん)をもまいらせしむることやうにとありし人をきゝしなりかく思ひまちてたりいふて急ぎんよりかようし給ひかゆる下さるゝ事にて、常に陳なりまゐぬ

わつかを残百人もつきめし、所きて夫山そしらむまで紀の攀(よぢ)より、前をおされは山下は里遠にとおりしくそ。まおちうろ燃(たえ)つえくるかり、いきどほと心おてよろりかんとおかんじまことにのよ見て抑々けまいは、真忠(しんちう)の心ばしを天感(かん)し給はずや。思ひのかやましく、と麓(ふもと)の里にまちよそり。民の喰まうにさへの心をかたらいしさに、おんあいとりせをへしうは、老たる樵(きこり)夫肝(きも)を消(け)し、是は変化(へんげ)の物そうしとは雲中より人間(げん)の乃わざにはあらしと不審(ふしん)しあへりまぬ。小性に長(おさ)建部(たけべ)兵庫頭(ひやうごのかみ)

と云し者。いやとよ越中より信州深志る人此方を入りてなにそ。雪をかしまいりせ道の安内（あんない）をさせよ。汝ら（えんぢう）るやさしくおもんはかりと引出物給をしと云しかハ。うれしさよりいとゝ心ひかるゝまとてけるしたり。越中外山（と）の城を十一月廿三日に出て。十二月朔日午（むま）の剋ハ上（え）の諏訪（すは）に着して。是より家康へ飛脚（ひきやく）をつかハせけれハ駿州（しんしう）府（ふ）中まて家臣乗馬（のりむま）五十疋伝馬（てんま）百疋むかひとしてさし付。家臣に到りまでことして不思（ふしぎ）なりける中に露をもなりやうにハ。徳川殿ハ浜松し

語らひし信にし。約束（やくそく）の労苦をとふらひつ。十二月四日遠州（えんしう）浜松（はま）の城に参り。家康へ対面（たいめん）し。羽柴筑前守秀吉を討亡（うちほろぼ）し。信雄の御本意を遂（とげ）させ申さん程におほしめし。羽豆（よう）州（てう）より清洲（きよす）の城に参て御礼申。上にけりまし評議（ひやうぎ）を尽（つく）し。則ち信勝（しんり）又深密に山路をたどりく。越中に立帰りたりしかバ義（ぎ）を守り信（しん）を厚（あつ）くせしに依て。秀吉と（と）は不和（ふわ）に成にけり。その後信雄卿（きやう）と（と）秀吉と和睦（くわぼく）ありしかば。佐々か志紀ゆへをさる

何る身も淀(やう)まなかりしかば越中四郡(ぐん)を三郡(ぐん)羽柴肥前守に給り。一郡佐々にあたへられけり。されば世中抱へかりけるに。宮よくそれを助ともいへ落つきしかば

何事しもかはらでぞある世中に。さしてや寛氏さろくあまたしんと始めるからり思ひ出されば。なかり。内藤如安年極寄(ゆうらく)の身をもつて秀吉公に咄(きさう)ひ入なりしり九州(きうしう)退治(らいぢ)の時肥後國を恩賜(おんし)に因(まね)て入部(にうぶ)を。旧臣(きうしん)蜂起(ほうき)ゝ得るあつて敵対(てきたい)せし者とハ

---

太閤はなをし。江州摂山以来労功(らうこう)を積(つみ)し者なれば。さびしく志給ふ事をさしもあらんとはかんとしけん。秀吉公もあくまでを知給ひて。勿論(もちろん)旧臣の恨(うら)みも理なきにあらねは。去れ佐々は信長公へ分しく左右を争(あらそ)ひし傍輩(はうばい)也けるに素(そ)性(せい)剛(しいかう)にして多勢をも進退(しんごい)せん者なれはかくありしかど。然るに恩恵(をんゑ)に強(しい)くあらさてふかゝ。実(じつ)にも其人なれは。旧臣田家(ろうくわい)切としてもそれ扱われは封(ほう)してん抱をゆるやかにさる故ゆを云給ふての御なみとみゑらずにあるはて

佐々いかめしく通をとまらせしかバさまよひとう感ぜ
しくぞ見えしよけり

---

○肥後一揆蜂起佐々退治之事

佐々肥後國受領之所へ个条之制書ある

定

一五十二人之國人へ無先規知行可宛行ふる事

一三年檢地あるまじき事

一百姓等不可痛様に肝要あるべき事

一一揆おこらざるやうに可遠慮有事

一上方普請三年令免許之事

右之條々無相違可守此旨也仍如件

天正十五年六月六日　秀吉御判

佐々内蔵助殿

肥後國拝領之折紙に國者之腋指并小袖
并重宝添制書ともにつかはされし故内蔵
助悉く須弟に餘てぞ覚えける。肥後ハ思之
外大國なるよし兼て聞及しか。実さもあらん跡
と佐々よろこびつ。所知之目録を見るハ受領せ
し甲斐もなしとてぞしう（是ハ百姓一人くへ一田畠そゆるいう様と記し付）

ガラス使用

（さしあたる事也）とや仰られけるに。悉く田畠之貢物を記し付さし出しけり。然處又は當地郡奉行の紀內よみてぬしを指出しけれとも。言を許容くいなひ不二承引一しと。仍て奇怪に思ひ出あ。すは計も是て國人を振廻。幸ハ日吉大史なる人也。のは能をかなせんとの廻文あり。日限に任せ何れも國人来りけるまでに。幸蔵ハ不レ残来りけり。来り給ふ人々饗膳結り能をかなはしめて饗しつゝ始る當地衆へ挨拶をつかはし。幸蔵を以て二誅果一有由にて。信らる左衛門尉。久世又助なと将を又あらい。三田村備左衛門尉なとを城大將として。三千余騎（天正元年八月六日）つかはし。然るに先手多勢にて攻入りけるのかのんあるハ注進させてよ内藤助を以て二籠向一と物しけり。熊本より城へ程七里あれとも。晩日より二出陣一地を急ぎける。陸奥の者共に幸蔵か館とはいふやとなりけるハ。熊本より多勢おしよせ。二三百にかこみ込みけるによつく。鉄炮之上手なる六百人。二十余か千余人播磨籠り防ぎ勢を請取し事なれとも。卒爾に寄せ給て一党もなくしけるによもやしとはかや思はまり。然る熊本

へ此旨注進しけれは翌日ノ午時内藤助も是へ陣し。粟谷の城を見るに山高うして。久世文安彌東善之丞ともに城中に付けるが凡八十余人三町ニは逃されとも巌崎そひえて岩岨つゞら折に柵を結まはし二三重廻てならへ山へ登りけれとも。敵も見て究竟の弓鉄炮を多く上せさせ。石さ鋼ひ撞と打けれしかハ味方共余人うたれけり。是をとるものとせは鉄を打入もかなはで。終に山をは人々引けり

---

○山康乃宇動文の右教に着雜後書とくる内藤助三千余騎を二手にわけ。粟谷が城へむかはせ一手は粟谷が嫡子山康と云城に打てゆ。勢をかけ引ひ三千余にて川向まで押寄。攻口を二手に分て攻けれ共その方に向ひけんと。内藤助の勢ハ多少をかんがへめさるゝ所。使者二騎越けるとも。依て不審に思ひ其方へハ案内たく川向ニ陣取一宿有て天地静せり。其使至るとひとしく川を渡とおし来て。依くの旗をに向ひけり。又は寄手の方より一合戦まいりけ

りんと呼はゝりけり。依て小姓馬廻まじく城を攻させぬ。城の方よりは小姓十人計使番之者十騎長巻三千人（長巻ハ三尺余りの刀をまやかしに柄四尺余あり てかち立の柄にまおせし也位をふさすなりもひとく）（百人ほど先に立ゝは しと世ハまれなり）傍弓二千人（百人あて組を 揉せかゝせ也）あるそはかし。依て大に怒りて曰。城を攻る様とよき咄し戮りんとせハ。むつかしかりし。此長巻三千人弓弐千人を左右に立。小姓十人ハあと後ろに。使番三人其声と一度に寄かゝれよ。一足もひかんとおもふ心露ほともなく奮起そ。唯只一散にかけて真へ一文字にはせかゝへしと云もはてぬに塵と

大音聲をあげ。推立てかゝりしよ。ふ動し勢を二千よなく不知しけるが。敵に味方を合されハ大海の一滴九牛之一毛ぞ。引つゝんで討捕や若者と云頃かゝりあれは。東西に開合せ走廻り追つ返り声をせんとてこそ翔ひける。依てハけ其やう軍にせましまくつきさやとだも夫おほなととかんて真黒によりて突かゝりきりかゝりければ。動もちやうしん遊で書にめてられたりかくあるうに省動も失荒けまさ木あひに因てうしろに立り揉さる其の死ぬ勤も

かれまうしとや思ひけんうし給ふところを聞しとしく。おのは一度に殿軍におそく。川へおとされおちしをよをおさへすかしはゞみと押て追うらに謀をくり。城を攻し勝もちられなくはおちあつく。思ふまゝにくひゐてけり

○言之動の智も内藤よらせて國人之心を変せらる支有動の臣は武畧且備りし者あまりしが。おほあまりし國人九方へ密かに云やりけるは。各沈思して未萌を継給へ。今おの有動か身の上まで表

何事もかくあるへし。それをとおもふところに去六月下旬妻那事去子細ありて剃髪染衣となりぬ。乳母上しけりは合掌におもし憐給ひけるに。抱し常のおもかけの御子を白髪衰せし容顔をきびしく戒しめ。今とはされ腋差をも髪重も柵を付廻し。前後何と給をも背くまじき首を固を卜給ひて物しけるは。めく國人なを思ふ図に給へ給えとのうなかるへし。先有動の力上を志果し久く無事なりし所延命之地を改易し。内藤

国立国会図書館　タイトル『太閤記 : 22巻』 請求記号 WB41-125　ガラス使用

助労居たるに扶助せしめんとの疑ひに入りし歟。然ハ当国地付城之普請を各勤めけるハ自縛之責とハ及ねど。此義於諸国思ひし此表をし掠む。然本之城にハ留守居之勢僅にて守護之家。急に掛攻へし。必城をとりきたるへし。たとひらハ内藤助定之後詰せんと急に陣するへき条。御帰路之より此る要所に伏兵し。討留んとの疑ひに入りしに。右之趣同意くかく。多かるは中平無遣味と志てめつらしけ言も何も同心しよかく国人内評し。善悟

等もおそれをなしつゝ。夜中逃く引払ひしか。小甚下総と云し者のミ。誓紙に信ありてのこりたり

評曰。多くハ勇士のミを愛し。智士を寵せハ悪心元なくなりぞ。又大志を抱かりしや。此謀計と以数多之国人心を一所に変し。内藤助と痛しめ剰婦を切腹させしも。皆智士か三すゝめを以ちぎりし動き自然にし此智士と党しいんあつきやうに老を養ひしかはし。家之急難とそのみへとして謀り出せしとりや

## ○熊本之城作く塩攻之事

山家之付城普請も未成に。國中一揆ども蜂起ゆひそめ兆出来りからくを寄又に熊本より後詰お来し。ゆく御陣し給へ。一揆等数万騎寄来て当城を幾重ともなく打圍ミけるなり。けらハ詐御くく後攻の軍をし。悉くて打果とて二ヶ所之付城には。三田村将左衛門殿三位とおし置ぬ。打立急ぎけるに。直にして八七里まいれも十里なり。然も近き道に赴きふくふるけめど。伏兵をれかさするハよもとあらし。唯郷士

ゆりし急けやとて。汗馬に策うち其日の暮打よ到て熊本に着陣しけれハ。城を稲麻竹葦を抱ねに打圍ミ。大将くハさるき玉を本陣とし備へり。痛しや内義助心ざしあるをます猛けれども。敵の備ハよし味方之勢ハ十分一なれども。やせんかくやあるまじと危し累包しくとも。いやくとゝせば呈て兔き事に遇ぬやせん。只向ひたる者をすゝ山本陳と見しらり。仕掛て合戦せよと。松原へ多兵作ゝらるれ共射にや付しかば。急ぎひと云ほどに

ガラス使用

徒擒なるまゝちんる引連きたるをもとも。ゐるき岸を便りく俟へられし。城を責るに同し。いくあり爲へきとも人はちんと云流りりけるハ。只鉄炮をもはゞへけるを競とも突かゝれと還使よそひ合しよ固く。指圖よ任せ弓鉄炮をそろへ射かけうち。かけ。喊くあるを上。喧と突かゝりしかハ。敵半町計さゝりしをも記まりなく引付て。徒をすゝ入く散くよ蹴ひ。終よ大軍を追散らし。唱凱歌をかく浮大利をうとも。塚を圍みさうり勢ハ少しも耳ゝ次ぬとゐり坂口を固して

かゝりしに依て。内蔵助手勢を具して突かゝりけるハ。城中より神保安藝守（兄越中守なり）突て出。内外より揉合せ。中方八方へ追崩し。首千九百余討捕上鯨波を作り。是よもひまつ三方ハいまゝ打圍て。鉄炮をうち入けよのあつをやゝまかくさゝりぬ。依く宿老共よ向て数度勝利を得られとも。取ゝて了後勢張目前よ至りしよれ。心ありて化依くれと世の誹を然ふ所ましいさ切て出一合戦せんと思ひめのあるへきと後しけきハ。各なり敵退散せしを

まめしく覚えしか。とかくまはら合せ御説く人々。見苦猶あるくこも利を失ひ給ふ事あまたハ。始ニ大利をし軍之氣脱。度々之勇功流にするものなりやとぞ申しぬ。諫め申し奉るに。中々續二十人之面々とりはしかゞ。其人ハ御指揮しかるべくもなしと云しかは。松原を呼て只今毎度ゝ労力を振へなり。是ぞ無心ゆへ下知に出ても。一揆原ハねりこまれ。見物に要所にていかなる嶮しき条究くも出入々と迄。松原ハ折ゝ立つゝ甲を脱捨息をはかんとせしを見るに。又突てかゝらんと取。甲を

くもに指揮し出で。あらし七百余人左右に隨へ。末重ともれくつまもりの敵を真中へほきさかり。右往左往に突まくり。暫く戦し處に。敵方大将菊地香左衛門と云し者。敵ニ味方ニ合されて百倍せりが其中に武勇多く討とられや者共とぞ大音聲を上下知せしの處に勇ミあつる一揆原弥増にかゝり来つて二方よりハ込をうたれよと呼ハり引包んとせしかども。思松原と云ましみるに無隔しげ引受まこしそ及くくよりけれバ敵ハ逆氣をはゆて陣へ與しけんとを述

操に於て戦ひなれハ不及力逐こ轡を廻り
兵のまゝなり
或曰。嵜續之假ハ義攢並をみん及ざ及没も
告待り也。我高量の善悪多ハはちんにあらんと
て。挑の理に且曉さ者ハ我之備且知らる者
なりて此人攢ひ者緣にめくらさ待るに因
て揃者切ておくへと云し也。然と云共宿老共
とかまらに合せ見んなへ。敵紋少福ハまたましき
と諫らると不用云しハ越度也。敵に小利
ちへなく剣へ防大利し勢ひも猶脱待るか

兎角果にかりけば勢ひと織田備後守殿ハ
よく待てしに害ひ給へ也しと也
後人評曰、信長公ハ哀ー附かやうのさし事
を用ゐ給ひ大利を失はれし事多かりし
然則嵜續の待し者我堅く制せんもに記
おさあらすば捨者に古今之異なくて用ゐ
に善不善之異あれ畢竟信長公之軍理
待られし程徳しハあらりしに可按かば何別に音山と
鐵者勢ひへまてしを森三左衛門尉乃長武ハ
あらん衛門尉と云し者是山を見て見んて印し案

御勢殿加へさせられ候やうにとぞ仰しおかれまし
くとさへ其までのなみと仰せられ近習ひつくし将
ようち笑せ給ひ氣運をよろこび召し我等なりしに
惑ひ給ふ人そのなかに不審に思ふ人も多
かりしと也。老人曰。吉凶損し歎くに及ばず
めれハ大事之あるめるとおもひてぞそのかみ
のへ事ちよみするべし

## 〇國人之内反忠之事

内義助も殿日頃ひそかに讒せしハ疲つかれ御休息
しけるをやまず急く殿りとおぼしきほどひそかに門
を敲くるに誰ぞと問ハ御用に宜しきところにて
来たりし者を近習の人是へ出むかへ其事申
されとまうしけれハ。建部兵庫頭出むかへ何ものぞと
云しと見ぞよくよりて給へ一揆大将たる明智ハ此人
虎口を牢けむと其事にかゝりしよし申しけれバ御
其ひらかれし人ハ後を廃つまゆきんとて遠く
皆寛く通し揆紙を持し来りしハ其云けるハ内
藤入内義助對面し。願ふもし幸とハ明智にて
指圖ありバ出ニ某家再忠不遠に悉計上なと事外ニ懇

ガラス使用

に逢しのぞミく義就者ぐハ手にて取りて同道にても
義首をとらしく撥云して取りるりがくつるし
かは晨雞あることに志さり。然ば此方援雲別れへつ
に。敵味方之陣に何となく此の兆あり。ハ味方續先
人を呼て。猶頭先る此の方へ急さ切て出よ中の上の
旗持し掛し勢ハ。味方に来て散し諜し合せ
軍せよと陣々にしらせく云渡し人とのを吹付る
此者申渡しけれバ諸早速おおり得し表ゑ
に此の方を圍ミし勢先の犯かしを云う續之ぞい
初いと告来るといふやいなや見をぬさ幢と討越

---

作り突かゝるへしと仰ければ下知しられハ皆案の
揃裏之謀叛出来ずそて敵を討首を捕
ければ撥原のきかゝりけるハ論せこそとせと云ける
計なく。我さきにと逃るまじくひ識に度に梅
よひける形勢をば追付追ひしが労せに思へるの
時に首掛て取りながらて着先鞠ハかりか
も及ざがくまで分捕するものとかくしやかり
見へし持ため犯ありぬ故つきのちからをつかれし者へき
程追うちませよ。一撥原は同じて取し合せ戦よ
事いろ犯他そと軍法を破て少く性まそゆるし

国立国会図書館　タイトル『太閤記 : 22巻』 請求記号 WB41-125　ガラス使用

けるハ中々脱ひ䛕り擐ひけるかゆゑそ見えしなけるかくて略翁頸をあつめ付させられけれハ三千二百八十余なりけり信孝翔ひとくりやゆや及ふ

評曰信孝ハ元君の厚恩を忘れ信雄に對し忠義も深からず有て爭へさりしハ不審疑くハ内義助太志をもちしくあれハ一生信雄へ天下を取まいらせのちくハ天の與のり執捨りしぬるまく は天下を辭奏せんとや思ひつらん秀吉公も此拔出て倍し成さず孫せしハ周公旦之心緒百分一にも忠義之実あるましけれハ久業をあらん徳を

国立国会図書館　タイトル『太閤記 : 22巻』 請求記号 WB41-125　ガラス使用

131
11
78

ガラス使用